北海道新聞

# 平岸の歴史を訪ねて

## ～縄文・古代史編～

### 第17回．あるアイヌの生涯～和人による虐待

平岸に残る唯一のアイヌ遺跡として、天神山チャシがあります。アイヌは文字を持たない民族であったこともあり、チャシについてわかっていることは少ないのが現状です。祭祀や談判（チャランケ）、資源管理の見張り場のために使われていたものが後年になって軍事用に転化されたとの解釈が一般的です。アイヌ民族は縄文人の遺跡をコロポックルが残したものと考え、敬っていました。天神山からは、以前の連載で述べたように、縄文土器などの多数の出土品が豊富に見つかっています。アイヌの人々は天神山を聖域として扱い、ここにチャシを建設したのかもしれません。

ふるい時代の北海道は、わざわざ農耕をせずとも採集だけで十分食べていける島でした。ニシンやサケの大群が来れば、それをつかみ取りにしていればよく、いわば採集生活の天国であるために、逆に高度な漁法は発達せず、農業も発達しませんでしたが、原始的ながらも平和な生活を営んでいました。そこへ本土から和人が流れてきます。戦国時代の末になると和人の諸勢力の中から松前氏が勃興し、渡島半島に割拠します。江戸時代の初めごろまでは松前藩はアイヌとの交易の利益の上に立っていました。その交易では数量のごまかしその他、ずいぶんあくどいことをしたとはいえ、交易は交易でした。が、「場所」という制度ができてから、藩のアイヌに対する態度が一変し、いわば奴隷主になりました。場所とは素朴にいえば漁場のことであり、当初は交易場所でしたが、藩がアイヌに生産をあげさせるため、場所を商人に請け負わせます。商人は場所ごとに運上屋を設け、アイヌを動物以下の扱いで働かせ、そこからとれる海産物を独占し、そうしてあがった利益を運上金として藩におさめます。松前藩はアイヌの犠牲の上で、何もしなくても金がとれるような仕組みになっていました。また松前藩は、アイヌが日本語を覚えるのを禁じ、農業も普及させず、道路の一本も整備しませんでした。アイヌが自立できないようにし、労働につかざるをえない状態にするためです。

このころの平岸近郊のアイヌの様子を見てみましょう。当時石狩地方はイシカリ場所と呼ばれ、商人「阿部屋」によって管理されていました。イシカリ場所は13の場所から成り立ち、平岸はその中の上サッポロ場所に属していました。江戸期を代表する探検家であり、「北海道」の名付

図1．彫エモニヲマの図
（アイヌ人物誌より）

け親でもある松浦武四郎は上サッポロに住んでいたアイヌ人モニヲマ(図1)との交流を記録しています(以下のくだりは新札幌市史より引用)。

石狩場所サッポロなる処の小使役を勤けるモニヲマといへるは当年三十七歳、妻はクスリモンといえるがありしも、是は番人に取られて、今は七十余歳になりけるイメクシモといえる母と叔母と三人にて暮らしけるが、性彫を好みて常に匙、手拭い懸け、小刀の鞘、膳、椀、菓子器、印籠等種々の物彫て、又短刀の鞘に唐草雷文等を彫すると衆目を驚かざることなし

これによれば、モニヲマは芸術家肌とでもいうべき彫刻の名手でした。モニヲマには妻クシリモンがいましたが、運上屋の番人に妾にとられてしまいます。二人の間にはまだ乳児の子供がいましたが、母親と引き離されたことにより餓死してしまいます。モニヲマは家族思いの男で、自分が番人より受けた責苦を母に及ぼすまいと、一緒に他所への出奔をすすめています。これに対し母は、「此処を捨て他え行時は、此屋敷に残し置墓所え誰壱人御酒を上呉るものも無ば、生たる我に孝行とも成べけれ共、死したる父や祖母・祖父は如何に何事をも云はざれども如何思ふことやあらん」と述べ、先祖供養のためにこの地にとどまることを諭しています。しかし母イメクシモは、モニヲマが番人に召集され浜で強制的に働かされている間に寒さと飢えのために亡くなってしまいます。モニヲマは病弱の母を心配し、番人に「機嫌相伺」に行きたいと申請しますが許されず、昼夜にわたり労働に酷使され続けていました。モニヲマは母の死も知ることなく、彼女の「機嫌」を案じていたのでした。

このようなアイヌへの虐待はモニヲマに限ったことではなく、北海道全域で行われ、結果アイヌの人口は激減します。武四郎ら幕府役人はこの事態を知り、強い怒りと義憤のもとで糾弾しますが、ほとんど改善されることなく明治を迎えることになります。

参考資料　新札幌市史第1巻通史1　、六章、四編　イシカリの改革とサッポロ、札幌市教育委員会

**バックナンバーお届けいたします**：ご希望の方は販売所までお気軽にご連絡ください。ご自宅までお届けいたします。

**「編集後記」**　～無知は罪なり～

21世紀となった今日でも政治家等によるアイヌへの差別発言が無くなりません。この問題を彼ら個人の資質に帰すのはたやすいですが、私たちもどれだけアイヌが虐げられてきた歴史があったのか本当に知っているのでしょうか。筆者自身、「旧土人保護法」に代表される明治以降の差別政策についてはうっすらと知っていたものの、本稿を執筆するまでアイヌ時代のサッポロでの和人による虐待については何も知りませんでした。紙面の都合上やむを得ず割愛しましたが、ここに記した以外にも様々な虐待行為が行われていました。これは人種差別ですらありません。アイヌを動物以下として扱い、搾取していた人々がいたこと。このことは北海道の歴史の恥部として、私たちはもっと知る必要があります。無知は罪なり。メディア業に携わるものとして、この問題については今後も機会を設けて発信していきたいと思います。

執筆者：道新永田販売所営業主任　伴野卓磨
1977年室蘭市生まれ。金沢大学理学部地球学科博士課程(古生物学専攻)を修了後、六花亭に入社。2011年より現職。

◇発行元◇
㈲北海道新聞永田販売所
〒062-0936
札幌市豊平区平岸6条13丁目7-18
Tel：０１２０-１２８-３４８
Fax：０１２０-１２８-３５８